

---

# とある少年の転生人生（アンノウライフ）

蒼井水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンノウンライフ  
とある少年の転生人生

### 【Nコード】

N1969X

### 【作者名】

蒼井水晶

### 【あらすじ】

何故か殺された（泣けてくるね）

とある少年があれ？真っ白？

何この世界？あんた神様？超能力くれる？

転生！？なんと「とある魔術の禁書目録」の世界！？

もらった能力は白ひげ＋エース＋クロコダイル＋！？

チート？あ、そうでもない。

さあ、原作ブレイクだ！！

僕に出来るか分からないけど。

（気弱だなあ僕）

## プロローグ（前書き）

小説家志望の学生です。このような場所に投稿するのは初めてです。  
どうかご教授よろしく願います。

ご都合主義、常識無視などは目を瞑っていただけるとうれしいです。

## ブローグ

### ブローグ

ピリリリリリリ！！

「あーもー、うるさいですね！」

ガチャン！

僕は、文句を言いつつ、目覚ましを止めた。

いつも毎日やっているマンネリな作業。朝起きて、歯を磨き、食事を食べ、制服に着替え、高校に行く毎日。

面白くもない、ただレールの上を走っているような虚脱感。

「よお、優ー！元気か！」

やかましい友人の声で、そんな憂鬱な思考から解放される。

「いいえ、元気じゃありません」

「おいおい、何時に寝たんだ？」

「たしか9時頃だったと思います」

「起きたのは？」

「7時だったかと」

「10時間も寝てんじゃねえか！十分だろ！」

「いいえ、まだまだ寝足りません」

「さすが、あだ名がねぼすけだけあるな」

「そのあだ名、あまりすきではないのですが……」

僕の名前は七城優一ななしろ ゆういち

知り合いの女子曰く、阿良々木暦（某有名作品の主人公）の髪を短くしたような容姿だそうだが。

これと言って特徴がない、ただの一般高校生だ。

あ、家族には、病気で体が動かない妹がいる。その介護が面倒で家出した、父親失格の男がいた以外には。

それを除けば、ただの一般高校生だ。

「おい。七城、七城！」

おっと、いつの間にか学校に着いていたようだ。

「これはこれでこうあるからして」

めんどくさい授業を聞き流し、昼休みも食事をする以外は寝て、また授業を聞き流し。

「ただいま」

「お帰り、お兄ちゃん！」

体が動かなく、僕よりはるかに辛いのに、花が咲いたような笑顔を見せてくれる妹には、いつも元気づけられてばかりだ。

家に帰って、妹とおしゃべりを楽しむ。これが、昔からの僕の趣味だ。

そんな毎日をごしながら、日常が続いて行く。

高校は面倒だし、何もせず、男と遊び歩いている母親には、心底うんざりだが、佳織かおりの笑顔が見られるのなら、こんな生活も悪くない。

そんな生活に終わりが訪れたのはちょうど一ヶ月後だった。

母親は仕事しないし、佳織に金を稼げるわけがない。僕が働いて家計を支えるしかない。

学校や、国から特別奨学金が出ており、学校のお金は心配ないが、生活資金をバイトだけで稼ぐのは並大抵のことではない。

体力も限界に近づいていた。そんな中、世間を騒がせている連続殺人犯が、僕たちの住んでいる街へ移動してきたとの噂が広がっている。

学校での措置として、原則部活、バイト禁止、午前授業で帰宅。しかし僕はそもいかなない。バイトしなけりゃ、兄妹二人食えなくなってしまうのだから。

僕は三つのバイトを掛け持ちしている。最後のスーパーのレジウチのバイトが終わったのが、夜の10時頃だった。例の連続殺人犯がよく活動する時間らしい。僕は漠然とした不安を抱きながら少しでも早く家に帰ろうと細く曲がりくねった裏路地を駆け抜けていく。

「坊主、夜に一人歩きは危ないってママに教わらなかったのか…。  
へへへへ」

……。うん。僕は呪われているらしい。泣けるね。

「あいにく僕の母親は、男と遊び歩いてるんでね。母親にそんなことおそわってないですね。」

「そうか、それは残念だったな！」

それと同時にめちゃくちゃでつかいナイフを突き出してきた。僕は横に転がってなんとか避ける。

「へへっ、なかなかいい体さばきじゃねえか」

「そりゃ、どうも！」

しゃべりながら、右の拳を振り抜く！狙いは顎！  
ビュンツ！

バシッ！

「おしかつたなア」

ものの見事に防がれてしまった。場慣れしてやがる…。

「悪いな。死んでくれ」

奴はそう言いながら、大上段に構えたナイフを振り下ろしてくる！  
避けられない！

ブシャアッ！

「ぐはっ！」

右目を縦に切り裂かれた。血が噴き出す。見えないわけではないが……。

「考え事してる余裕があんのか？」

しまった！！

僕の悪い癖だ！！

「終わりだ。悪いな」

ドスッ……！！

その音と共に左胸に焼きこても当てられたような痛みが走ると同時に意識がだんだんと遠のいていく。

ああ、もう少し生きて……いた……か……た。  
佳織……、先……に……逝く……兄……さんを……許してくれ……。

「奴だ！逮捕しろ！」

「君！大丈夫か！」

「救急車！」

「本当にそれでお主はいいのかのう？」

最後にお爺さんのような口調の声が聞こえ、僕は意識を手放した。



## プロローグ（後書き）

えらいシリアスになってしまいました。ここまでシリアスにする気はなかったのですが…。

駄文です。

感想、ご指摘どしどしください。

荒らしはご遠慮願います。

## 登場人物紹介（前書き）

今回は本編ではなく、オリキャラの紹介とさせていただきます。  
+ 中二病注意！！

## 登場人物紹介

名前 七城優一 ななしろゆういち

学園都市レベル5第二位

能力名 マグニチユード 世界滅亡。震動能力のレベル5。

容姿 阿良々木暦のような顔つき。右目を縦に走る大きな傷がある。「禁じ手」を使うときに右目が開く。いつもこの傷を前髪で隠している。殺されたときの名残。

身長 168?

性格 落ち着いているが、キレると怖い。戦闘狂？

一人称 僕。

二人称 あなた、君。

口調 基本的に丁寧な言い回し。 ですゝ××でしょうか？など。キレると口調があらつぽくなる。

能力の解説 白ひげと同じように大気を殴りつけ地震を起こせる。

さらに拳や脚に衝撃を纏わせる事が可能。大気を砕いて直接震動させ、相手を直接攻撃したり、物理攻撃を防ぐことが可能。

震動と衝撃、どちらも操ることが出来る。

加えて、粒子を高速で震動させることにより、体中から荷電粒子砲を放てる。

空気中の水素に衝撃を当て、強制的に核融合を起こせる。

さらに同じ原理で酸素に衝撃を当て、発火させメラメラの実の真似事が可能。

また、震動を手や脚に纏わせ高周波ブレードを造り出すことが出来る。

さらに、砂を震動させ、刃にしたり、地面を陥没させ、流砂を起こすことができる。

衝撃を足などから放出し、瞬間移動ができる。

大気を掴み動かすことができる。

その他の技 神から与えられた、超古代文明の兵器（神様曰くプレゼント）剣術、体術なども使いこなせる。よって、超能力が使えないときでも十分に戦える。

備考 広域破壊能力ならば一方通行をも凌ぐ。まさに、世界を滅ぼす能力を持つ少年。チカラ

一方通行と唯一対等に戦闘ケンカが出来る人間。原作のキャラ何人かにフラグを立てる。妹大好き人間。

名前 ななしるかおり  
七城佳織

主人公の妹。生まれつき体の四肢が動かない難病を抱えている。しかし、笑顔を絶やさない、優しく、明るい性格。

容姿 異常と言っても良いほど絹旗最愛に似ている。ただし、髪が腰までのロング。髪の色は桃色。

かみさま  
神様

真っ白い空間に浮いている、人ならざる者。言い換えるならば、「世界そのもの」しかし、自称「文庫化、二次創作」の神様で、かなりはっちゃけた性格。

七城佳織を助けるのと引き換えに、主人公を「とある魔術の禁書目録」の世界に送り込んだ。

容姿 サンタさん。

ダークナイト  
闇騎士

主人公に、戦い方を叩き込んだ人物（本当に人か？）。主人公の能力を鍛え、技を開発させた。神様曰く「正義の心に目覚めた悪魔」だそうだ。

容姿 「デビルメイクライ」のスパイダ。しかし、人間態の容姿。リベリオンと呼ばれる大剣を優一に与えた。

技は個別に説明する場を設ける予定です。

## 登場人物紹介（後書き）

この時機に不謹慎な気もしますが、一方通行に勝てそうな能力って、これしかありませんでした。

東北の皆さん、がんばってください。日本中が応援しています。スパイダの人間状態の容姿って、何かに載っていたはず。

皆さん、検索してみてください。

どこだこは!?(前書き)

神様がめちゃくちゃはっちゃける(はず)ので気をつけてください。

どこだここは！？

「う……、僕は死んだのか」

気づいて、顔を上げてみるとそこは、真っ白な世界だった。ん？真っ白な世界？

「どこだそりゃー……！！！！」

って、叫んでしまった。それはそうだ。顔あげたら水平線すべて真っ白だったのだから。

「僕は、死んだんだよな」

「そうじゃ」

「うおっ！誰だあんた！」

「神様じゃ」

えーと、頭の痛い人が出て来たのかな？でも確かに僕は死んだはず。

「そうじゃ、お主は死んだ。心臓を一突きにされてな」

地の文を読んだ！？まあいいや。

「つまり、ここは天国？」

「少し違うが、まあ、そのようなものじゃ」

「ちなみに、あんた、何の神様ですか？」

「文庫化、二次創作の神様じゃ」

「んな神様どこにいるんだー……！！」

はあ、はあ、はあ、ちよつと喋っただけで疲れたよ…。

「で、何で僕をここに？」

「お主の思念が、かなり、というか、近年まれに見る多さで残っていたので。こちらに魂を召し上げたのじゃ」

「はあ、なるほど」

何故、この世に未練があつたのか。それは自分で考えずとも分かる。妹の佳織のことだ。難病を抱え、一人では生活どころか、ベットから動くことも出来ない。そんな子を残して逝ったのだ。

僕じゃなくても、未練が残るはずだ。



「自分で分かっているようじゃな」

「ええ…、お願いします！僕を甦らせてください！」

「不可能じゃ」

「何故ですか！」

「お主は死んだ。よってこの世界にもう一度生まれ落ちることは出来ん。そういう神の決まりなのじゃ」

「そんな…、じゃあ、誰があの子を守るんだ！！」

「くそっ」

「じゃが、このままでは、お主の残された妹があまりに不憫だ。妹は儂が面倒を見てやる」

「そんなことが出来るのか！？」

「儂は神じゃ。それぐらい簡単だ。しかし、無料<sup>タダ</sup>と言うわけにはいかん。等価交換と言う奴じゃ」

「何をすればいい」

「『とある魔術の禁書目録』は知っておろう」

「はい。有名なラノベですので」

「そのキャラの一人、アレキスター・クロウリーはな、神になろうとしているのだ。それはならぬ。人一人は神には成れぬ」

「何故です？」

「神というのは、人の子の大いなる善行、大いなる善の心があつて神は生まれるのだ。人は神にはなれぬ。人が成れるのは、人のみだ。アレキスター・クロウリーはそれを破ろうとしている」

よく分からん。神の定義のようなものか？

「ならば、そいつを殺せばよいのですか？」

「いや、違う。お主というイレギュラー因子が入ることで、やつの計画は頓挫する」

ともかく、受けるしかない。それがあの子を救うのだから。

「殺さねばならぬのは、学園都市第二位の男、垣根てええええいとくうううううんだ」

「誰だそりゃ！！なんだその愉快な名前！」

「冗談はさておき、奴が使う力は、<sup>ダークマター</sup>未元物質。この世の物ではない物質を扱う。それすなわち、神に通じる。奴は消さねばならぬ」

「……。分かった」

「お主が得る能力は白ひげ、エース、クロコダイル、その他、攻撃能力だ」

「白ひげってワンピースの!？」

「ああ、そうじゃ」

「お主は、レベル5の一方通行も倒せる可能性のある震動能力者として認定される。能力名は世界滅亡<sup>マクニチユード</sup>。第二位じゃ。すなわち、垣根を殺害する。その前にお主が殺されてしまつては元も子もないのである。本当は訓練しなければならぬのだがはつきり言つてめんどくさい。よつて技のデータを直接お主の脳に転送する。<sup>ダイクナイト</sup>闇騎士!」

めちやくちやな事言つてやがる。

「闇騎士とは？」

見るからに怪しい名前なんですけど。

「儂の盟友じゃ。そう、呼ぶならば、『正義の心に目覚めた悪魔』とでも、呼ぼうかの」

大丈夫なのかその人。

「呼んだか？」

うわ、神様にため口聞いてるよ!

凄い人だったのか!

「うむ、こやつに例のデータを送り込んで欲しいのじゃ」

「了解した」

その言葉と共に闇騎士さんは、こちらを見、僕の頭に手を置いた。

「少し苦しいぞ。頑張れ」

手を頭に置くと同時に、凄まじいとしか形容出来ない量の膨大な情報が入つて来た。

「ぐあああ!!」

頭が割れるように痛い。

何か僕ここ最近叫んばかりだなあ。

「お主の住居は用意してある。まあ、その前に、垣根を殺しに行つてこい」

んな無責任な！！

「お前の妹のことは、心配するな。俺がしっかり面倒見てやる。これでも子持ちなんぞでな。俺は魔王を殺した男だ。俺を殺せる者は人間界にはいない。頑張つてこいよ」

何か最後に超力<sup>スーパ</sup>ミングアウト来たー！！！！

僕は驚愕と共に、また意識を失った。

どこだここは！？（後書き）

垣根ファンの皆さん、ごめんなさい（ドゲザ）。こうしなければ、話が続かないので…。何か序列を下げるのも嫌だったので。

神の定義は僕の希望です。あくまで僕の意見なので、気になさらないでください。

感想、ご指摘、どしどしください。

## 圧倒的な力……（前書き）

主人公がチートじみえています&垣根が雑魚にしか見えません。  
垣根ファンの方々ご注意ください。

戦闘描写はこちらの都合で、視点がはっきりしませんが、ご容赦ください。

## 圧倒的な力……

結論から言おう。

僕が神からもらった力は、圧倒的だった。

いや、圧倒的と言っても足りないかもしれない。

それほど、僕の力は大きすぎた。

自然現象を起こせる、もしくは操る。

その力の前では、ありえない現象だろうが、この世に存在しない物質であろうが、無力だった。

その証拠に、第二位は今、僕の足下に死体となって倒れている。

その表現には、少し、というか、かなり語弊があるかもしれない。

なぜなら、僕の足下には粉碎<sup>ペースト</sup>状にされた肉塊があるだけなのだから、たかが肉塊、されど肉塊。

学園都市のレベル5といえは軍隊を相手取っても勝てると評判の間だ。

その中でも、頂点。

二枚看板の垣根帝督を一方的に粉碎できるほどの力を僕は手にした。この力を僕は自由に使える。

この世界をぶっ壊そうが、上条に変わる英雄<sup>ヒーロー</sup>になろうが、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>を倒して名実共に頂点に立とうが何でも出来る。

でも、僕はこの力を何かを、大切な誰かを守るために使いたい。

もうあの子には会えないけれど。あの子の事は忘れないけれど。

でも僕は、大切な誰かを自分の全てをかけて守りたい。

もう一人、人の命を奪ってしまったけれど。

もし、その大切な誰かの命が明日までなら、僕の命も明日までいいい。

でも、生きようと言うなら、地獄まで着いて来ると言うなら、僕はそれに付いて行くだろう。

彼がここまでの覚悟を決めるに至ったのを見るには少し時間を遡らなければならぬ。

「うわっ!!」

起きたらそこは見たこともない天井とベットだった。

「どこだ!？」

つて、僕は転生したんじゃないか。

状況を整理しよう。

僕は、『とある魔術の禁書目録』<sup>インデックス</sup>の世界に転生した。

僕は、震動能力のレベル5である。

僕は、どうやらすでに、レベル5の認定を受けているらしい。(神様の口ぶりから)

僕の頭の中には、技のデータが入っているらしい。ちょっと、頭の引き出しを開けてみよう。

(ただいま主人公は技の脳内確認をしております。しばらくお待ちください)

「はは、ん、なるほど。ていつかさあ、普通の技でも地震起きるってヤバすぎない？」

どんな能力だよそれ。

白ひげって恐ろしい男だったんだな……。

(ただいま白ひげの恐怖について回想中……。しばらくお待ちください)

「こわっ!!」

まあ、垣根を殺せとかなんとかめちゃくちゃ言ってた神様でも、神様は神様、ちゃんと仕事はしてくれたらしい。

よく分からん能力の検査とかも受けないで済んだことだし、少しゆっくりしますか。

珍しく、僕にしては不安も何を感じず、それから一週間は確実にごろごろ、だらだらして過ごした。

料理はまあ出来るし、（レパートリーが少ないのが残念だが）冷蔵庫には、一週間分以上の食料が入っていた。

神様の心付けってやつだろう。

でも、ずっとごろごろしているのもどうかと思って、家の近くの河原をジョギングしていた時だった。

いかにも不良ですって風情の皆さんがたむろっていらつしやった。

しかも絡まれた。セリフは「金だせよ」とありきたりだったのを追記しておく。

「いやです。どっか行ってください」

「おい、やめとけ、駒場！こいつはヤバい！」  
アースクエイクインジョン  
『地震解放！』

ワンピースの白ひげと同じ構えをして大気を殴りつけ、その衝撃力で攻撃。

えゝ、不良達はどっかにぶっ飛んでいきました。

ちなみに、不良の一人は浜面だったが、優一は忘れていた。原作を少しだけ変えてしまっていた。

それを見ていたのは垣根帝督だった。

「おい、テメエが新しくレベル5に認定された野郎だな」

おお、こいつが垣根帝督！狙っていた相手があちらから来てくれるとは偶然ってありがたいものですね。

「俺はテメエが気に入らねえ。死ね！」

マジですか？理由が「気に入らねえ」どんだけ上から目線なんだこの野郎。

「食らいやがれ！」



その台詞と共に伸ばされて来た末元物質の翼は、僕のわずか数センチ

ダークマター

手前で停止した。

『無駄遣い』  
リミテッド・アタック

与えられた衝撃を基に、能力者に危険が及ぶと判断された無意識下の演算により、自分に与えられた衝撃に対して、反対方向から力を加えることで、攻撃を無効化する技。

この技で、末元物質は全て無効化した。

「厄介な能力だな、本当によ」

「お褒めの言葉をどうも！」

その言葉に皮肉で返し、僕は技を発動させる。

「消えた!?!」

インセント・ゼロ  
『縮地』

足から衝撃を放出し、瞬間移動をする技。

これで、垣根の懐に入った。

ファストアタック  
『瞬撃』

縮地で相手の懐に入り込み炎を纏った拳と掌打で攻撃する。

ドド！ドドン！

人と人がぶつかったような音ではなく、まるで戦車の砲撃のような轟音が空に轟いた。

「あぶねえ、てめえ、能力を完全にモノにしてやがるな」

垣根はその翼で、炎の拳を防いでいた。

僕はまた、距離をとる。

「まあね」

サラサラッー

「おいおい、なんだよそりゃあ…」

そう、いまの僕の左腕は、例えるならばワンピースの赤犬大将の技、『大噴火』を模した形をしていると言うべきか。

その巨大な拳は砂で出来ているが。

「粒子震動を利用して砂を制御しているのか！クソやろう！」

「貴方はこの膨大な質量を受けられますか？」

覚悟しやがれ。

『デザート・リユヌ  
砂丘の月』

ゴオッ！！

その巨大な砂の拳は、確かに垣根帝督をとらえたはずだったが、そう簡単にはいかなかったらしい。

「っぐう！」

《SIDE：垣根》

確かに、奴に打ち込まれた砂の拳は効いた。もう左腕は使いもんにならねえ。

だが、俺の末元物質に常識は通用しねえ。絶対殺してやる。

第二位に、喧嘩売られたこと覚悟しやがれ。

《SIDE：優一》

砂丘の月で死ななかつたか。

でも、左腕は折れた。これで戦力は半減だ。

「行くぜ！」

と、垣根はまた翼を伸ばしてきた。

「え？」

当たり前だ。今僕自身がどこに居るのか把握してない。

『デザート・リユヌ  
伝説の傭兵』

微弱に空気中の粒子を震動させることで、光を屈折させ敵に認知されなくなる技。

よし、垣根の真後ろだな……。

『デザート・ラスパーダ  
砂丘の金剛宝刀』

砂を震動させ複数の刃を作り、敵に放つ技。クロコダイルのやつ。  
「……………」

ぱつさりと背中から生やした翼が斬れた。

「クソ野郎が！」

今のうちに攻撃を連発。

ストライク・ショック  
『衝撃収束』『フック』

白ひげがワンピースでやっていたように、手や脚に衝撃を纏わせ、直接地震の衝撃力を見舞う。

ボクシングのフックのように左拳で弧を描くように殴りつける。

「ぐああっ！」

垣根はピンポン球のように跳ねて転がる。

追撃！

ストライク・ショック  
『衝撃収束』『パワーレッグクロー』

衝撃収束の状態で放つミドルキック。

ストライク・ショック  
『衝撃収束』『パワーレッグスピン』

パワーレッグクローの次に放つ回し蹴り。

ストライク・ショック  
『衝撃収束』『パワーレッグシュート』

三連撃のシメとして放つ吹き飛ばし効果のある蹴り。

ドゴォン！！

そのまま垣根は、河原の近くにあった、マンションに激突。

まだまだ追撃！

ブレイズナックル  
『火拳』

エースの火拳そのままの攻撃。

マンションを五つほど焼き尽くしつつ垣根を吹っ飛ばし、さらに追

撃。

サーブルス ベザード  
『砂嵐』『重』

掌から、砂嵐を発生させその重さを叩き付ける技。

あんななどかい質量受けたら、生きてられねエだろ。

念のために見に行ってみるか。

ハイパーロード  
『大統領選挙』

高速の粒子震動により、滑るように高速移動する技。滑った軌道からは炎が噴き出す。

「う……………」

おいおい、生きてるのかよ。すごいね、未元物質。  
あんなモン食らってるから、全身火傷&全身複雑骨折だとしても、  
すごすぎるでしょ。

僕がぶち抜いて来たマンションに視線を向けた、その刹那。  
垣根帝督は立ち上がったていた。

「どうやったんですか、まったく、規格外ですね」  
ダークマター  
未元物質で体を直したってわけか。

「この俺をここまで追いつめるとはなあ。いくぜ！」

太陽光をその翼に通過させ、殺傷力のあるビームを放ってくる。

『縮地』でかわして、

『神火 炎槍』  
フレイムランス

両腕から、炎の槍を飛ばす。

これは、一本が垣根の肩に刺さった。

「ツチ」

翼で、自分を包み込んだ後、全方位にビームを放ってきた。

『エレクトリックショット』  
『荷電粒子砲』  
ガトリング  
『乱射』

全方向に荷電粒子砲を乱射する。

これで、迎撃する。

「本当に憎たらしい野郎だぜ」

「お互い様だ」

『ハイパーロード』  
『大統領選挙』  
ストライク・シヨック

『衝撃収束』 『右ストレート』

移動した勢いを乗せて、殴りつける。

垣根が吹っ飛ぶ。好機！

大技を食らえ。

「Game set!!」 (和訳：終わりだ!!)

『レ・ミゼラブル フロントクラッシュ』  
『嗚呼無情』  
『無慈悲』  
アースクエイク

全方位に『地震解放』を放つ技。ただし、この場合攻撃対象が一人。  
『地震解放』 16発ぶんのエネルギーを、体を未元物質で補強して

いたとはいえ、直前までひん死だった垣根帝督が受けたらどうなるか。

見事にスプラッタな光景が出来上がる。

加えて追記しておくと、この学区は完全に瓦礫の山に変わっている。

その夜、学園都市に激震が走る。

「学園都市第二位殺害される。殺害したのは、新しくレベル5に認定された震動能力者。能力名、マゲニチコード世界滅亡  
名前は七城優一。よって、上記の者、第二位と認定する」

僕の転生人生はここからはじまったー。

圧倒的な力……（後書き）

垣根帝督はぼこぼこにされます。

主人公は決め台詞や、挑発に英語を使います。

次は、いよいよ「あの人」に会います！

## 戦闘スタイル。独自設定（前書き）

今回は主人公の戦闘スタイルと独自設定を書いていきます。

## 戦闘スタイル。独自設定

戦闘スタイル。

能力を中心に、剣、銃、体術、古代兵器を絡めた複雑な戦闘スタイルを構築している。

「どんな敵にも」

「どんな強さでも」

「どんな大きさでも」

「どんなに規格外でも」

この4つの柱を中心に臨機応変に全ての敵に対応出来るようになっている。

さらに、剣術に関しては圧倒的であり、ローマ正教そのものと対峙して、これを粉砕するほどの戦闘能力がある。

「悪魔の力」を使い、その力は天使をもねじ伏せるほどの力。世界最強の近接戦闘能力を持つ。

剣で戦いながら、銃で攻撃。銃を撃ちつつ能力使用。さらには、魔術師でも展開が難しい古代兵器を一瞬で展開、変形させるなど、攻撃に関しては間合いを感じさせない。

その戦闘はまるで、伝説の『忘れ去られたアルキュオネの剣士』を彷彿とさせる。

使用武器。

リベリオン

反逆者と名を冠する、邪神を魔界ごと封印した、忘れ去られた剣士に由来すると言われる両刃の大剣。

闇騎士がかつて使っていたと言う。ミサイルをも弾き返す凄まじい強度を持つ。



また、これを背負っているだけでも魔術は無効化され、魔術に対してこの剣を振り下ろせば魔術は破壊されるという不思議な力を持っている。遠くのマンションをも両断するなど、斬撃を飛ばしたりすることも可能。

さらには、切れ味が永遠に衰えない、一方通行の反射を貫通もしないが、反射も出来ないなどと言った普通の剣ではありえない性質をもつ。

剣に選ばれた者しか振るえないと伝えられている。

優一は自分の身長より10？以上でかいこの剣を軽々と振るう。

## レッドクイーン

血塗れの女王と名を冠する、赤い刀身を持つ片刃の大剣。

リベリオンに流れている「悪魔の力」の波長を変えることにより変形する。

リベリオンと違い、斬撃を飛ばすことは出来ないが、その代わり、流れている「悪魔の力」を噴射剤のように使うことにより、音速をも超える剣速で剣を振るうことが可能。

闇騎士からのプレゼント。

ここから下は神様からのプレゼント。

M1911・45ガバメント・カスタムモデル・ルガー

主人公の机の中に入っていた大型の45口径の拳銃2丁。

何故か、弾切れすることがない。

正確には、弾切れはするが、マガジンがなくならない。すべて、銃器（超古代兵器は弾丸の概念がない）は同じ性質。

故に、超連射が可能。太もものホルダーに入れてある。これだけは学校でも携帯している。

超連射の時にリロードをどうやっているのかは永遠の謎。

ライフルなみの貫通力を持つ最新型のサブマシンガン。  
2丁腰に仕込んである。

MP5SD2

銃口ではなく、銃身内部に消音機能を備えており、高い消音性を誇る。

ショルダーにストックを折り畳んでいれてある。

G36

最新型の5.56?口径のアサルトライフル。取り回しがよい。  
背中に回してある。

MK.17

さまざまな周辺機器を取り付けられる7.62?口径の次世代志向  
型バトルライフル。  
背中にG36に交差するように回してある。

マウントレールリボルバー「デヴィルハンター悪魔狩人」

ショルダーのガンホルダーに入れてある優一の「切り札」

「悪魔の力」を込めた銃弾を放つことが出来、その威力は「神の右  
席」を一撃で行動不能にする威力。

弾丸ベルトを腰に付けている。

ツイン TWIN バレル BARREL

狩猟用の水平二連ショットガンの銃身を切り詰め、片手発射ができるようにしたカスタム銃。

リロードとかどうなっているのよとかは永遠の謎。

バトルジャケット  
戦闘上着

武器ではないが、ダンテが着ている赤いロングコート、ネロが着ている黒いロングコートのこと。  
ジャケットの裏に大量のマガジンとショットガンの弾薬などが入っている。

腰には「デヴィルハンター悪魔狩人」用弾丸ベルトを装着しており、ズボンには、M1911のマガジンが入っている。

また、コートの裏側には、弾薬の他に、古代兵器も入っている。別名「四次元コート」

リベリオンはダンテのように直接背負っている。

また、学生服のときには、M1911のみ、携帯している。

#### ファランクス 武器庫

様々な武器、火器、銃器に変形し破壊をまき散らす超古代文明の遺産。

不気味な髑髏と紋様が描かれたスーツケースの形をしている。

#### デスベレード 殺唄 ファランクス

武器庫以上の武器、火器、銃器を内蔵し変形する。周りの全ての物を破壊する超古代文明の兵器。

蛇と髑髏が絡み合う複雑な紋様が描かれたギターケースの形をしている。

また、「斬魔刀」が入っている。

#### ざんまとう 斬魔刀

日本刀の形をした、魔を斬るための剣。殺唄の中に入っている。

次元を斬ることが可能。

#### ギルガメス 衝撃鋼

生物と同化して、その体の一部を鋼と化す（主に手と脚）超古代文明の金属。

強力な衝撃を生み出す力を持ち、主人公の超能力と合わせ、さらにその威力は増大する。

また、衝撃を蓄積させることで、さらに破壊力が増す。

射程距離は短いがその威力はまさに、『衝撃的』である。

#### ルシフェル 無尽剣

爆発する剣を空中に配置出来るトリッキーな武器。

爆発する剣を無尽蔵に生み出す超古代文明の装置。

生み出した剣は的に突き刺したり、空中に固定したりすることが可能。

たま〜に薔薇をフィニッシュと共に投げることがあるが、特に深い意味はない。

神裂火織によれば、「我々の使っている力とは真逆の力」らしい。

不幸なことに、優一は様々な魔術結社から命を狙われることに。

#### デスベラード

殺喰以外は、『デビルメイクライ4』に出てくる武器を少しだけもじったものです。

### 独自設定

#### レジェンド 伝説

遙か昔、邪神を封印した一人の剣士のこと。

『「賢王アルキユオネ」と讃えられた古代文明の王の右腕であり、邪神を魔界ごと封印したと言われている。

しかし、封印と引き換えに人々の記憶から忘れ去られてしまったと

いう。』

この伝説を、『アルキユオネの忘れ去られた剣士』と呼ぶ。魔術師が最終的に到達するのは、この伝説の真実だという。

その戦闘スタイルは、大剣と小型の弩いしゆみ二つ、選ばれし者の武器を使った戦闘であり

優一と非常に良く似ている。

## 戦闘スタイル。独自設定（後書き）

オリジナル設定を織り交ぜてみました。

『デビルメイクライ4』の武器をどうしても出たくて……。ええと、ゴメンナサイ。

転校そして一目惚れ！？（前書き）

姫神のキャラ崩壊が著しい恐れがあります。

転校そして一目惚れ！？

朝起きると、寝室の横の机に書類が置いてあった。

神様からで、「転校手続きを済ませた。学生服と私服は、タンスに入っている。学校頑張れ！」

あ、もし、魔術側の人間に例の剣のことを聞かれたら、『忘れ去られた剣士』の息子と言っておけ。

p.s 私服は儂の趣味で、デビルメイクライ4のネロとダンテじゃ」

「フザッケンナアアアア！！！」

朝一番に大声を出すことになるとは、この場に居なくても振り回してくれやがる。

本当に困った神様だな。

気を取り直して、時計を見るともう8時15分だった。

急いで学生服を着て、ガバメント二挺を太ももホルダーに入れて、

インソレント・ゼロ『縮地』

あつという今に職員室へ。

「すいません、今日転校してきた七城ですが、月詠先生は居ますか？」

「あなたの足下にいますですよー」

「おわっ！」

ちっちゃー！そりゃ目線の下で、見えるわけないよな。

「さて、第二位の七城ちゃんですねー。ついてきてください」

原作キャラに会ったの二人目だけど、本当に原作と同じとは。驚くな。

何故か誰もいない老化、じゃなかった廊下を歩いていると、いきなり子萌先生に質問された。



「七城ちゃんは何故学園都市に来たんですかー？」

これまたディープな質問だな。

あんまり、べらべら喋りたくもないし、こういうときはこれだな。

「それは、秘密です」

ウインクする。

なんとかごまかせたかな。

「つきましたですよー、少し待っていてくださいね」

その言葉の後、子萌先生は教室に入って行き、騒がしい教室が少し静かになった。

《SIDE：上条》

「レベル5の転校生がきましたですよー」

今日の朝のHRで子萌先生が言った言葉は少なからず俺たちに衝撃を与えた。

なぜ、この学校にそんな高レベルの生徒が来るのか。

不思議だった。

「入って良いですよー」

その言葉と共に入って来た少年を見た瞬間教室は静まり返った。

長い前髪で右目を隠し、太もものホルダーには、自衛のためだろう拳銃が入れていた。

いや、それは問題じゃない。

問題は彼の雰囲気だ。口には微笑を称えていたが、目がどこを見ているのか、そう、例えるならばまるで、別の世界を見ているような俺の右手で触つたら消えてしまいそうなほど儚げな雰囲気。

イマジンブレイカー

その雰囲気には飲まれてしまった。

俺はそれよりも、いつも無表情なはずの姫神の瞳がキラキラと輝いていたことが気になった。

そして、姫神はこうぶちかました。

「あなたに。一目惚れした。いきなり。恋人とはいわないから。一緒に帰ったり。デートしたりしよう」

[illegible]

《SIDE：優一》

一度こういう事があったから、ある意味予想してたけど。

僕の顔つて阿良々木暦に似てるから、それなりにもとの世界では人  
気あつたらしいから。（友達談）

まさか、姫神にヒットするとは。

まあ、姫神は僕も好きだし。

「ええ、構いませんよ」

[illegible]

と驚愕の叫びがまたもや響き渡る。

「どうして！？まだ会ったばかりなのよ！」

この巨乳は、吹寄さんかな？

「彼女は美人ですし、」

「ですし？」

「断られそうな申し出を言つて不安で震えてる女の子を泣かせるほど、人間やめてませんので」

「は。う。う。」

かわいらしい悲鳴（？）を上げて、姫神は気絶して僕にもたれかかって来た。（一番前の席だったため）

それを見て、つい佳織を思い出してしまったらしい。

包み込むような優しい微笑を浮かべた。  
ほほえみ

（友人談）

「はあ……」

熱っぽい吐息（後の青髪ピアス談）を女子全員が吐いた。

「上やんや！第二のカミジヨ一属性や！男子軍全軍突撃ー！！」

青ピだね。アホだけど。青ピじゃなくて、アホピってか。

「何かヤバそうですけど。僕がレベル5ってこと、忘れてません」

「あ」

『サージインパクト  
哭打』

相手に向けた掌から、衝撃波を放つ技。

対雑魚用。

「ぎゃあああああー!!」

案の定、上条と、土御門は防いでいた。（正確には土御門が上条の後ろに隠れた）

「すごい！何ですかそれ！」

知ってるけど嘘をつく。つかないと色々ヤバいでしょ。

「魔術ですか？」

この言葉を言った瞬間、土御門の顔が一瞬だけ陰しくなった。  
おもしろいねエ。

「ああ、この右手は『幻想殺し（イマジンブレイカー）』って言うて、異能だったら何でも打ち消せるんだ」

「へえ、おもしろいですね」

「俺は上条当麻。よろしく」

主人公だよ！テンション上がるよ！

「七城優一です。震動能力のレベル5です。能力名は<sup>マグニチュード</sup>世界滅亡です」  
「敬語じゃなくていいぜ」

「分かりつじやなかった、分かった」

これを始まりとして、自己紹介タイムが始まった。

授業をまともに受けるのは久しぶりだなあ。

今日1日は疲れそうだなあ。

転校そして一目惚れ！？（後書き）

どうだったでしょうか？

原作キャラの口調が似ない。

授業の様子は書けません。ごめんなさい。

次回は、放課後のことから書きます。

それでは。

## ゲーセンと事件（前書き）

主人公までもチートっぽいです。  
スキルアウトがドンマイです。  
最後にちよこっただけ黒子が出ます。

## ゲーセンと事件

僕と上条、土御門、青ピ、吹寄さん、姫神（本人には名前で呼べといわれたがまだ早いと断った）

この六人で、ゲーセンに行くことになった。昼休みに決めたのだが、吹寄さんはすごい仕切るのが好きだと知った。

あんまり原作では描写されてなかったような……記憶が曖昧だ。

僕自身、以外とゲーセンは好きなので、昼休みに、上条達がその話を始めた時、真っ先に賛成した。

家に一人で住んでいることや、妹が学園都市の外にしていること（神様曰く）などを話したら何故か驚かれた。

姫神に、

「私は。寮に入ってない。子萌先生の家に。居候してる。だから。一緒に住もう」

と言われて一悶着あったけれど、それ以外は特に何もなく、平和だった。

この話が終わったあと、土御門に呼び出され、なぜ魔術の存在を知っているのかなどと聞かれたが、『忘れ去られた剣士』の息子だと言うと、慌てた様子で、四方八方に電話を掛け始めた。それを見ているのはおもしろかったね。

「護衛を付ける。優やんも気をつけてくれ」

「護衛なんていりません。僕は父親からもらった剣もあるし、兵器もありますから」

「そういうわけにはいかないんだ」

「何故です？」

「優やんを狙う連中のこともあるが、優やんの力のことだ。『忘れ去られた剣士の力』を受け継いでいるんだ。その危険性は計り知れない」

「つまり…、僕自身の監視ってことですか」

何様のつもりだ、土御門。

この場で潰してやろうか。

「よほど死にたいようですね……」

僕は左腕を炎に包んで、『殺し』の意思表示をする。

「違う」

慌てない、か。さすがに修羅場は潜ってきてるな。

「優やんの力が暴走しないか見張っとくんだ」

はあ……。

神様に叩き込まれた力が暴走するわけないだろうに。

「問題ないです。父親直々に戦闘技術を叩き込まれましたから」

「絶対ないな？」

「暴走したとしても、その力は僕自身の制御<sup>コントロール</sup>下にあります。問題ありません」

いくら転生したのがばれないようにするためとはいえ、よくこんな虚言<sup>ウソ</sup>が出てくるなあ。

自分の才能かな、これは。あんまりありがたくもない才能だけど。

「分かったにやー。それじゃあいろいろとよろしくにやー」

ふー。疲れた。土御門って何考えてるか分からない所があるからな。  
言葉<sup>セリフ</sup>には気をつけないと。

そして放課後。

補習をなぜか免れた上条と、成績悪いのか良いのか分からん青ピと、吹寄さん、姫神。

そして、僕。

この、仲のいいのか悪いのか分からんとかくカオスな集団は、繁華街のゲーセンへと、歩を進めていた。

「なあ、優一」

「何？当麻？」

「お前っていつ学園都市<sup>コウ</sup>に来たの？」

「えつと……、ちょうど2ヶ月ぐらい前かなあ？」

上条当麻とは気が合ったのか仲良くなり、口癖のようになっている敬語も抜けていた。

たった二時間かそこらで、名前で呼ぶようになっていた。

「優さんは、どんなエロ本を読むんや？」

「はい、死んでください」  
「ばごきつ。」

毒舌と共に、ツツコミにしては激しすぎる一撃。（『ストライク・ショック 衝撃収束』状態での腰のひねりを加えたアップー）

青ピは吹っ飛んで、壁に激突。普通は一般人には即死レベルの一撃なのに、すぐさま立ち上がってくる。

実はレベル5とか？

「しかし、それは何なんだ？ 大きすぎるだろ！？」

俺の背中にある、大剣の事かな？（リベリオン）吹寄さん？

「まあ、くわしくは言えませんが、父親の形見ですかね」

「そうか……」

今の僕の服装は、黒の足下まであるロングコート、深紅のワイシャツ（シャツ出し＆第二ボタンを開ける。）黒のジーパン、黒のハイカットスニーカー。

ネロっぽい出で立ち。

リベリオンを左手（僕は左利きだ）で抜けるように、背中に背負い、太ももにはハンドガン×2、腰にはP90×2。

所詮、武装集団程度しか出て来ないと思っている。（スキルアウト アクセラレータ）

まさか、一方通行に襲われるなんてことないだろうし。

そういえば、そろそろ「絶対能力進化実験」を御坂美琴が知って、止めに行くんだっけ。で、当麻も止めに行くと。

原作を読んでないから分からないや。（クスども）

とりあえず、そんな研究をしているイカれた研究者には消えてもらわないとな。

あとは、一方通行の本音を引き出したりして、英雄サイドに引き込



まないと。  
大変そうだなあ。

「ついたにゃー」

「遊ぶぞー！」

着いたようだ。

何か注目されてる。どうしたんだろう？

吹寄さんの胸？ 姫神の巫女さん服？

「「「「「いや、お前（優一）の背中の大剣だよー！」」「」「」」」」」  
マジですか！？

「お客様。凶器は持ち込み禁止です」

「預けるとこあります？」

その場の全員が思っただろう。根本的に何かが違う。  
超弩級の天然さんですか？と。

「いえ、そういうことではなくてですね……」

「じゃあ、あんたが預かってもらえます？」

何かが間違ってる。

絶対何かが間違っている。

全員の意見は一致していただろう。

「まあ、いいです」

「「「「「いいのかよ！」」「」「」」」」」

入口に居た全員からツツコミが来た。

「ま、まあ、早く行こうぜ」

それから僕はゲーセンを回った。

正確には、パンチングマシンで僕が計測不能の値を出したり、当麻が両替機に金を飲み込まれたり、色々あったが。

そして僕らが外に出ようとしたとき、それは起きた。

「おら、テメエら全員金を出せ！」

「頭の上で手を組め！」

はあ、やだやだ。

### 《SIDE：上条》

そう、来たのは10人以上のスキルアウトだった。

しかも、俺たちの目の前。

「おいテメエが人質だ！」

と、連れ去られたのは姫神。

横の優一の表情にあきらかに影が差した。

だけど、口元は妖しく笑っていた。

まるで、獲物を見つけた肉食動物のように。

「人の友達に手エ出してんじゃねエよ」

明らかに口調が変わっていた。

それから優一は圧倒的だった。

『シャドウノック  
影打』

優一は一瞬で、姫神を捕らえていた男の後ろに回り込み、蹴りを食らわした。

たまらず、姫神を放した所で、俺が姫神を助けに入った。

男は、ショットガンをぶつ放そうとしたが、

その前に瞬間移動して、

『ブラスト・ブレード  
震動霊剣』

手や脚に震動を纏わせる技。高周波ブレードを造り出らしい。

『スパークロー  
掌握斬』

五本の指に震動を纏わせ、掴むようにして切り裂いた。（俺にはそう見えた）

「ぐああっ!!」

肩口を切り裂かれ、スキルアウトはたまらず悲鳴を上げる。

「テメエ!!」

他の連中が逆上して銃をぶつ放そうとするが、優一がそれよりもはるかに早く動いているため、姿を捉えることができない。

残りの連中のうち、半分はハンドガンで肩や足を撃たれ、行動不能になっていた。

あとは、膝蹴りで天井に叩き付けられたり、

『ヒゲルマ  
緋車』

炎を纏った回し蹴りで吹っ飛ばされたり、

『エレクトリックショット  
荷電粒子砲』

指先などから、ビームを放つらしい。で、肩撃ち抜かれたり、

『ファイアモーゼ  
炎戒』

優一の回りに炎を発生させる、で火傷したり、

最後の二人は、

『フレイムタワー  
火柱』

『炎戒』から、火力を増し、その名の通り火柱を作る。

で顔を焼かれ、

最後の一人は、

「ふざけんな!!」

と完璧にキレて、革ジャンの中から、長ドスを出して構えたのだが、斬り掛かる間もなく、

優一は背中の手を回して、自分よりでかい大剣を左手で片手抜きし、袈裟懸けに振り下ろした。

ズバッ！

長ドスをへし折り、リーダーであろう男を斬った。

思わず叫んでしまった。

「やりすぎだろ！死んでるかもしれないんだぞ！」

「大丈夫。死なない程度に『調節』したから」

なんて野郎だよまったく。

恐らく3分も経っていなかっただろう。たったそれだけの時間に15人近くを「殲滅」したのだから。

その能力もさることながら、脅かされるのは、その基礎身体能力だ。銃を撃ちまくる手練、膝蹴り一発で大の男が吹っ飛んで行くほどの体術、そしてなによりも、自分より大きい大剣を片手で振り回せる力と技術。

いくら俺に『幻想殺し』があっても負けるなこりゃ。

そして優一は近くにあったパイプ椅子に座るところ言った。

「あーあ。もう少し楽しめると思ったんだけどなあ」

「せ、戦闘狂だにゃー」

うん。そう思うよ俺も。

少し時間がたっただろうか。もう上条さんにはお馴染みの台詞が聞こえた。

「ジャッジメント風紀委員ですの！！」

## ゲーセンと事件（後書き）

どうだったでしょうか？

主人公の服装はダンテやネロのようなイメージです。

次回は風紀委員の支部に行きます。少し短めになる予定です。

主人公以外の視点が多くなるかもしれません。

原作キャラにやっぱり口調が似ない。

どうしよう。

## 少年の真実（前書き）

いつにも増して中2感たっぷりです。  
気をつけてお読みください。

## 少年の真実

《SIDE：白井》

いつものように風紀委員の事務所へ行き、初春やお姉様、佐天さんとお話していた時、その連絡が入りました。

ここから少し離れたゲームセンターに強盗が入り、人質を取った、と。

警備員が来るまで押さえていてくれということでした。  
アンチスキル

初春は戦闘に向いていませんので、私が必然的に制圧することになるのですわ。  
わたくし

私はゲームセンターなどにはあまりいきませんから、初春にコンピューターで場所を割り出してもらい、すぐさま空間移動いたしましたの。  
レポート

「風紀委員ですの！！」

そしてレポートした私の目の前にあった光景は、スキルアウトに囲まれて怯えている方々ではなく、お姉さまを狙う類人猿と、その取り巻き二人、巨乳の女性（羨ましいですの！！）巫女服の女性、パイプ椅子に悠々と座る凶器を背中に背負った殿方でしたの。

「遅かったな白井、ゲーセン強盗は撃退されてるぜ」

「上条さん、一体何がありましたの？」

「その優一に聞いてみな」

「あなたは一体何者ですの？それに、背中の大剣きりつぎはなんですか？」

「いきなり、何者ですかと聞かれましたか…。僕は七城優一。背中のはまあ、曰く付きの品ですね、詳しくは言えませんが」

「そうですか……。これはあなたが？」

「ええまあ、一樣病院にでも連れて行ってください。行動不能にはなっていますから」

「分かりました。あなたがこれをやったのだしたら、支部で始末書を書かなければいけませんので、支部まで飛ばします」

「あ、彼女も連れて行っていていいですか？人質にされてしまったので構いませんわ」

私達は117支部へと移動しました。

「ただいま戻りましたわ」

「あ、黒子お帰り。どうだった？」

「それがもう終わってましたの」

「終わってた？どういうこと？」

「私が連れて来た殿方が……あら？」

どこにいったのかしら？

「すいません、僕にもコーヒーもらえます？」

「わたしも。お願いします」

二人揃って馴染んでる……ですのー！ー！ー！ー！

「えっと、誰？」

「僕は震動能力のレベル5、七城優一です。よろしく、常盤台の超<sup>レ</sup>電磁砲<sup>イルガン</sup>」

「わたしは。姫神秋紗。ただの。原石」

「……は？」「……」

「……ありえない（ですのー！！）（です）」「……」

こんな穏やかそうな方が第二位！？かんがえられないですのー！！  
そういえば自己紹介してなかったですの。

「申し遅れました、わたくし、白井黒子と申しますの。能力はレベル4の空間移動能力<sup>テレポート</sup>ですの」

「そうだった！！あたしは御坂美琴。能力とかは知ってるでしょ」

「私は初春飾利と言います。能力はレベル1です」

「佐天涙子です。無能力者です」

「ご丁寧にどうも」

「一つ聞きたいんだけど、初春さん」

「はい、何でしょうか？」



「頭に乘せてるの、花瓶？」

「違います!!」

最初に初春を見た方は何故そうおっしゃいますの!?

まあ、確かに遠くから見ればそう見えますが。

佐天さんの方へ目を転じてみしたら、顔が赤くなっていました。  
大丈夫でしょうか？

《SIDE：佐天》

初めて彼を見た時、「かつこいい」と思った。

一目惚れとかじゃなくて、イケメンの芸能人を生で見た時みたいな。  
レベル5だと聞いた時、私を差別したりするんじゃないかと怖かった。  
レベルの高い人達は、私に軽蔑の眼差しを送る人が多かったから。

（御坂さんは別!!）

それが怖かったけど、逆に言われた。

「ご心配なく、そこら辺の能力者<sup>ザコ</sup>みたく無能力者を差別しません」

「じゃあ、逆になんで無能力者<sup>わたし</sup>を差別しないんですか!？」

「逆に、ときましたか。そうですね……」

と七城さんは少し考えこんで、こう言った。

「そんな事言ってる連中は、能力云々より、人間性が問題でしょう？」

こんなこというレベル5は他には御坂さんしかいなかった。

この人には好感が持てた。

「あの、携帯のアドレス持ってますか？」

「ええ、交換ですか？構いませんよ」

「……あ、私も（わたくしも）」

結局四人とも交換か。何だろう、七城さんて人を惹き付ける雰囲気があるよね。

どんな人なんだろうなあ。

《SIDE：優》

「さ、お茶はこれくらいにして、始末書にサインして頂かないと」

「ああ、そうでしたね」

美少女5人も集まるとやっぱり華があるよね。

転生前あっちだったらモテてるだろうに。

「サインは名前だけでいいですか？」

「構いませんわ」

七城優一と。

「ありがとうございますわ」

さて、後は帰るだけかな。

「もう夕方。早めに。戻った方が良くかも」

「そうだね」

「もう失礼してもよろしいですか？」

「ええ、長くお引き止めして申し訳ありませんわ」

「何かあったら風紀委員に連絡してくださいね」  
ジャッジメント

「第二位ですから問題はないとおもうのですが……。あなたがたも

危なくなったら連絡してください。文字通り飛んで行きますから」

「あははっ！おもしろいジョークを言いますね。でも、ありがとう

ございます」

「では」

「あなたは。私を。助けてくれた。ありがとう」

「当然です。だって、友達でしょう？」

「はあ……」

「どうしました？」

「ううん。別に。（私は。恋人同士が良い）」

姫神はそう言つと、首を振った。

溜め息ついた気がしたんだけどなあ。

「じゃあ、先生に僕の家で寝泊まりしていいか聞きますね」

「あ、先生、姫神を家で寝泊まりさせていいですか？」

「男女がお泊まりするのはどうかと思うのですがー」

「大丈夫です。部屋は離れてるので問題ありません。そこまで、理性弱くありません」

「しかたないですねー。特別ですよー」

「さ、行きましょう」

「晩ご飯は。どうするの？」

「家に材料がたくさんあります。何が食べたいですか？」

「エビフライ。かな」

「分かりました、行きましょう」

「ここが。あなたの家？」

「ええ、部屋はたくさん余っているから、どうぞ好きな部屋に」

「ありがとうございます」

食事を終えて一息つこうかなと思ってソファに腰掛けた時、姫神が話しかけて来た。

「あなたは。何故敬語を使うの？」

「何故って、口癖のようなものですから」

「嘘。あなたは敬語を使って。自分の感情を。押さえ込んでいるだけ」

「何故そう言いきれるのです？」

「あなたは。いつも。哀しい目を。してる。」

「……………」

「あなたには。妹さんがいる。そう聞いた。四肢が動かない難病だと」

「そんなこと一度も言ってない！！何故分かる！？」

「あなたの目が。すべて語っていた。この世界の人間ではないことも。私のいた村には転生した人がいたことがある」

「確かに、僕は前の世界で殺された。なぜこの世界に来たのかも、僕の目的も、詳しくは言えない。でも、信じてくれ。いつか全て話すから」

「分かった。あなたが。哀しいなら。私が全て。受け止めてあげる。泣いても。いいよ？」

その優しい声に惹かれて、僕は大哭きした。姫神は、ただ無言で抱きしめてくれた。

家族のこと。妹のこと。

全部僕が背負っていた。泣きながら話したと思う。何を言ったのか泣きすぎて覚えていないけど。

その時僕は、姫神かのじよを好きになつていたのかもしれない。

「ごめん。恥ずかしい所見せたね」

「大丈夫。あなたがどんな人でも。私は信じる」

「ありがとう、秋紗」

「!!!!!!」

「僕の秘密を打ち明けちゃったんだから、名前で呼んでも良いよね」  
「もちろん!!!」

その時の秋紗かのじよの笑顔はずっと心に残るものだった。

お風呂に入り、歯を磨き、寝る。

何年ぶりに泣いたせいかわ、すぐに寝付いてしまった。

夢の中に闇騎士が出て来て、僕にこう言った。

「お前は冗談抜きで『忘れ去られた剣士』の息子だ！お前の父親は、5年前に失踪しているが、その時は、邪神の封印が一時的に緩まっていた、そして、あいつは時空魔法を使って、この世界に来た。そして、命と引き換えに邪神を封印した」

「あいつ？あなた、家の父親と知り合いなのですか!？」

「盟友だった。だが、あいつは力がもうなかったに等しいのだが、命を掛けて邪神を封印した。そして、その力を受け継いで、それよ

り高い資質を示したのがお前だ」

「じゃあ、全て知っていたと!？」

「ああ、すまない……」

「いいです。父さんが、僕らを嫌いではなかったのですから」

「そうか……」

闇騎士は微かな微笑をその色白の顔に浮かべた。

しかし、次には厳しい表情になって言った。

「恐らく邪神はまた復活するだろう。それを止めてくれ。お前なら

出来る」

「僕の彼女に危害が及ぶのでしたら」  
ひめがみあいさ

「もちろんだ」

「分かりました」

「あ、質問いいですか？」

「妹はどうしてますか？」  
かおり

「元気だ。心配するな」

良かった。

「ではな」

僕は夢から覚めて、考えをまとめていた。

僕のやることは、アレイスターの計画の阻止と、邪神の封印。アレイスターの計画の余波を始末すること。  
多すぎでしょ。

まあ、もう一度寝ますか。



## 少年の真実（後書き）

あれー、ここまで展開早くするつもりはなかったんだけどなあ。

キャラが余計な動きをたくさんしてくれちゃいました。

姫神が言っていた「転生した人」とは主人公の父親です。

実際には転生ではなくて、時空間魔術で、世界の壁を超えて来たのです。

次回では、主人公が襲撃されます。  
それでは。

## トラブル吸引機！？（前書き）

ほのぼのしていると思います。

主人公が若干惚気てます。

お気をつけください。



## トラブル吸引機！？

「おはよう。よく眠れた？」

うん。朝から美少女の笑顔は。ものすごく健康に良いと思うな。

今日は日曜日。学校もないから、秋紗と当麻と一緒に学園都市を回ることになっている。

しかし、当麻がどこかへ行った。

あいつの寮へ行って、インデックスへの自己紹介ついでに居場所を知っているか聞いたが、「分からないんだよ」と一蹴されてしまった。

恐らく御坂美琴と「絶対能力進化実験」の事について話しているはず。

当麻と一方通行が戦うのはもう少し先のはずだ。  
アフセラレータ

垣根帝督を殺害した時点で、暗部間抗争はなくなったはず。

僕も理事会には睨まれていると思う。

嫌な予感がする。

僕の「予感」は自分に流れている『悪魔の力』が危険を察知しているらしい。

どう見ても魔術だろうに、身体に異常は起こらない。

頭の中の知識からみると、僕の力は、魔術でも、科学でもないらしい。

父親は正義に目覚めた悪魔だから、半分僕も悪魔って訳か。

まったく、どこの『デビルメイクライ』だよ本当に。

と、秋紗が無口なのをいいことに、僕も思考の海へと沈んで行く。

「あ。着いたよ」

……ああ！！

今僕らは、第7学区の『セブンスミスト』に来ている。

秋紗曰くデートだけだ。

「どこから。回る？」

「秋紗の好きな所でいいよ」

「それが。一番困る」

じゃあどうしようかなあ。

うーん。

「女性服を回って行く？」

「うん。それがいいかも」

僕らは今朝、当麻がいないからどうしようか？と相談したあげく、デート兼服を買おう！

ということになりました。

二人ともまともな服をもっていないし、秋紗に至っては、巫女服だし。

僕だってある意味特注品？

「うん。これとこれがいいかも」

秋紗が選んだのは、カラフルでおしゃれなワンピースと細いジーンズ。

ワンピースの下にジーンズを履くような感じだった。

「似合ってるよ。秋紗ってスレンダーだから」

女の子の服はよく分からないけれど、細身な彼女には良く似合ってたと思う。

僕は、黒のミリタリーブーツに、白地に赤で髑髏と英語が描かれているＴシャツ、紫のパーカー、黒のゆったりしたズボンを買った。

僕自身、かなり適当に選んだ。

さあ、食事にでも行こうか、と外に足を向けた時、ドアが吹っ飛んだ。

「全員死にたくなければ手を上げろ！！」

まったく、僕は、どこかのトラブル吸引機かよ……。

空力使い（エアロハンド）かな。

いや、もう一人いるか。

「どうだ？」

「問題ないぜ」

はあ。さっさと始末しますか。

「ところが、問題大有りなんだなあ」

「んだとコラ！」

「テメエから死ぬか！？」

と吠えつつ火球を放ってくる。

もう一人は発火能力バイロキネシスか。

僕は火球を衝撃を纏った手で打ち消す。

「な！？打ち消した！」

「テメエ、何の能力者だ！！」

「あれ、知らない？世界滅亡マクニチユードって言えば有名だと思うんだけど」

「彼は。元第二位を。殺した」

「ひ、ひいいいいいい」

「ハッ。所詮小物かよ」

味気ないなあ。

風紀委員ジャッジメントですの！！」

「ああ、白井さん。こっちですよ」

「あ、七城さん」

「僕の名前を出したらどっか行っちゃいましたよ」

「分かりましたわ！！失礼しますわ！」

はあ、風紀委員も大変だなあ。

「秋紗、戻ろっか」

「うん。そうだね」

僕たちは家に帰ってお昼を食べた。

あんなことあったんじゃないしあ、そとじゃ食べれないし。

秋紗が、おにぎりとお味噌汁を作ってくれた。

うん。僕の彼女にはもったいないと思うぐらいおいしい。

「うまい！」

「ふふっ。ありがとう」

癒されるなあー。秋紗の笑顔って。

おっと。惚気になってしまいそうだ。

さて、昼寝でもしますかね……。

「秋紗、一緒に寝ますか？」

「あ。それいいかもね」

横に秋紗が身体を横たえる。

涼しげな香りが、秋紗から香ってきた。

香水でもつけてるのかな？

……すー。

「ふふつ。優一は。本当に。良く寝るね」

と秋紗が優しく微笑んでいたのを僕は知らない。

夕方、あんな事が起こるなんて、このときの僕は頭の片隅にも無かった。

## トラブル吸引機！？（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は戦闘はありませんでした。ほのぼのした話にしたつもりです。次回は夕方から、夜にかけての話です。激しい戦闘の予定です。

## 襲撃1（前書き）

主人公が殺人鬼と化しています。  
出血も多いです。  
お気をつけ下さい。

## 襲撃 1

ん？今何時だろうか。

昼寝して2時ぐらいに起きるつもりだったんだけどなあ。

「秋紗、今何時？」

「えーと。3時だよ」

うわわわ、寝すぎた！！

何となくヤバい気がする。

外に行つて様子を見てこないと。

嫌な予感がビリビリ語りかけてくる。「外に出ろ！！」と。

「ちよつと出かけてくる。帰りは……、分からないかも」

「分かった。気をつけてね」

外に出て、走り出したとたん狙撃。マジですか。垣根帝督殺害の影響はそんなとこまで広がっているってのか。

「アイテム」「グループ」には会いたくないな。

原作キャラを敵にはあまり回したくない、麦野沈利とは、あんまり相性がよろしくない。

と、思つたら目の前にはバードスウィッチ駆動鎧。

恐らく今考えられるのは、学園都市暗部の襲撃。もしくは僕のことを消したい魔術結社。

この二つ。

まだ夕方、魔術結社が部隊か何かを送り込んでくるのなら、夜のはず……。大部隊で動くには夕方では一般人が多すぎる。

となると、暗部の襲撃か？

それが第三者か……？

「クククッ。第二位を殺した実力はあるようだな」

「邪魔です。死にたくないなら、どいてください」

「ふん。お前はここで……！」

目の前の誰かさんが喋っているけど無視。

『エア  
AIR TRICK』

姿が消えるほどの高速移動で、相手の頭上に出現する技。

「悪魔の力」を使っている。

「なっつ！」

『アースクエイクインジョン  
地震解放……！』

誰かさん、仮に殺し屋Aとしようか。

殺し屋Aの頭上の大気を砕いて駆動鎧ごと潰す。

それを合図としたように、暗部のみなさんがご登場。

銃やなにやら持ってらっしゃるから、下っ端だろう。

「撃てえ……！」

撃ったって『リミテッド・アタック  
無駄遣い』で無効化されるだけなんだよ。

加えられた衝撃力を計算、能力者に被害が及ぶレベルなら全て空中で停止させられる。

ベクトル攻撃ぐらいじゃないとダメージ通らないし。

あ、あとは『幻想殺し』か。ダメージ通るのは。

「効いていないだと」

当たり前でしょうに。こちらら垣根帝督殺してんだよ。

「はあ、さっさと消えてください。今だったら追っかけたりしませ  
んから」

「うるせえ！」

僕を囲んでいた内の一人がナイフを持って突っ込んでくる。

僕にたいして突き出されたナイフは虚しく空中で停止した。

「効かないんですよー」

「バシユン……！」

『エレクトリックショット  
荷電粒子砲』 『ロングマス  
神槍』

荷電粒子砲の応用技の一つ。相手の頭か顔面を掴んで、「圧縮され  
た荷電粒子の槍」でぶち抜く。

「はい、まずは一人目……」



「……………」

後ろの奴が無言でアサルトライフル撃ってくるから、  
タンッ……。

「なにつ！？」

スカイダンス  
『飛空』

足から衝撃を放出して爆発的な脚力で空を駆ける技。  
で、弾丸避けて、

空飛んだ勢いのまま踵落とし。

「ぐあつ！！」

バキッと音がして、肩が砕ける。

ストライク・ショック  
『衝撃収束』

で腹を殴りつけ吹っ飛ばすと、

前方5人の連中が怯んでる隙に、

エレクトリックショット  
『荷電粒子砲』  
アンチマテリアル  
『弩』

蹴りと共に放つ高威力の荷電粒子砲。イメージとしては、黄猿大将  
の足から放つレーザー！。

ドキンッ！！

「ぎゃあああああ！！！」

上半身が吹っ飛んで終わり。

最後の二人は両腕に発生させた『ブラスト・ブレード震動霊剣』で斬り上げてさよなら。

「ほう。やるね」

どうやら本隊が到着したらしい。

「メンバー」と「ブロック」、「スクール」の残党。

そんなところかな。

「覚悟はいいか？」

「あなたがたこそ」

博士と査楽かな？

シユンッ

「死ね！」

確か原作によると、『キルポイント死角移動』一方通行による仮称だったか？

自力で1次元上の理論値を算出できないため、他人の位置情報を基にする必要があんだったな……。

『伝説の傭兵』スデルス

「な、どこに行ったね!？」

こうすればお前は移動が不可能だ。

『伝説の傭兵』は攻撃をすると自動的に解除してしまうが、この距離なら外すことは無い。

『神火 陽炎』フレイム ビストル

両手の指から、炎の弾丸を連射する。

「あつつ!ふざけやがっ」

ドスッ!

『震動霊剣』ブラスト・ブレード 『滅殺斬』デススパー

震動を纏わせた手刀で相手の心臓を貫く。

無論、瞬殺だ。

「貴様ッ」

博士だっけ。原作では垣根に瞬殺されていたような。

『震動霊剣』スパイルホロウ 『螺旋抜斬』

腕の造り出した高周波ブレードを火花が出るほど高速回転させ触れたものを切り刻む技。

「ぎゃあああああああ!?!?!?!」

そんなものを腹に叩き込まれてはたまったもんじゃないだろう。あれだけ血が出てるんじゃないやほぼ即死だろう。

「くっ、全員退避しろ!」

「ブロック」の連中だな。

警備員やってる女の人以外は消そうか。

『大統領選挙』ハイパーロード

で逃げる奴らの前方に回り込み、

リーダー格の奴にたいして、

『衝撃収束』ストライク・シヨック 『閃崩掌打』センショウシウウダ

衝撃を纏った強烈な掌底突きを放つ。

「がはっ！！」

並の人間なら、内臓破裂つてところ。

後の二人は腰から抜いたP90で蜂の巣にして終わりだ。ちなみにリベリオンは目立つので、家に置いて来ている。代わりに右の腰には斬魔刀さんまとうがぶら下がっている。

ダンテが着ている赤いロングコートのおかげか、ここまで来るのに、誰にも見咎められていない。

まあ、刀抜くほどのレベルの相手じゃなかったけどな。

「何故私を殺さない？」

「あんたは警備員アンチスキルだろ。暗部抜けてそっちに専念するなら殺しはしないです。さっさと消えてください」

「ありがとう……」

名前は忘れたけれど、その人だけ逃がして周りを見渡して見ると、死体、死体、死体。死体の山。

20人ぐらいで襲って来たけど全部返り討ち。

人を殺す、というか、敵を殺すことに容赦が無くなった。

元々父親が悪魔殺しまくってるし、邪神封印してるから、敵には容赦がない所を血として受け継いだのかな。

秋紗には知られたくないことだね。

僕は家に帰ったが、案の定秋紗に見つかり、大目玉を食らった。

「何を。してるの。これは。殺人なんだよ」

と怒られたが、学園都市の暗部が襲って来たこと、そして、魔術師が僕を狙ってくる可能性、秋紗も巻き込まれる可能性など、敵を殺さなければ僕と秋紗の命が危険にさらされることを2時間かけて力説したら、納得はしなかったけど、許してくれた。

「でも。あんまり。殺しちゃだめ。腕一本切り落とすぐらいで」と言っただけには驚いた。

「もう夜。食べものも。あまり無いから。買い物に行こう」

「分かった」

まさか、買い物の帰りで、僕の予測が当たるとは。  
僕は本当に呪われているらしい。

## 襲撃1（後書き）

いかがだったでしょうか？

主人公は殺人を肯定していませんが、否定もしません。  
罪の意識はあるのでしょうか？

それは次回と、そのまた次回で明らかになります。

## 闇の兆し（前書き）

主人公の殺人への考え方ができました。  
今回はかなりシリアスです。

## 闇の兆し

夜の道路。

秋紗とたわいもないおしゃべりをしながら、スーパーへの道を歩く。秋紗の吸血殺し（デীবブラッド）は吸血鬼を誘い出す。

僕の「悪魔の力」は悪魔を誘い出す。

もつとも、地獄or魔界の扉が開いていないと入ってこないし、悪魔を信じていない場所にはあまり悪魔は現れない。

それより怖いのは、悪魔の高位種族である、魔族だ。狡猾な知恵を持ち、強力な闇の魔術や、攻撃を繰り返す。

魔族の支配階級は魔王や、邪神、悪魔創長、魔帝、などと呼ばれ、人語をも理解する。人に化けることまでするのだ。永く生きている

ものは、人より遙かに知恵を持つものもいるのだから。

もつとも異質なのが、混沌の悪魔。この世界とは別の混沌の世界からこの世界の歪みを通してやってくる。

4大神と呼ばれる4柱の邪神が司っているとされる。

詳しくは僕も知らない。情報が少なすぎるのだ。

何故、こんな事を言い始めたのかと言うと、僕らの目の前に立ちはだかった「スクール」の一員、『心理定規』がいきなり苦しみ出し、化け物（太った触手をもつ巨大な二足歩行のナニカ）に変わったからだ。

「きゃあああああああ！……！！！」

側にいた女性が悲鳴を上げる。

「いやあああああ！……！！！」

秋紗も悲鳴を上げる。

「うわあああああああ！……！！！！！」

男性が恐怖の叫び声を上げる。

僕はというと、背中にまわしてあったMK・17を取り出して固まってしまった。

そりやそうでしょう。いくら敵対していたとはいえ、顔立ちの整つた少女が、化け物へとかわつたのだから。



力な攻撃も可能になる。

通常の銃撃『ノーマルショット』と違ってパワーが有り余っているようで、さすがの僕もその威力を持て余し気味。

『チャージ  
SHOT2』

1より威力が上がった『チャージショット』  
弾丸がヒットした相手を燃焼させる。

「よし！動きが止まった！」

悪魔そのものじゃなくて、人が悪魔の『核』になっているなら『人』を悪魔から引き剥がしてやればいい。

ようは負の思念が化け物の形を取って現れたのだろう。そこに悪魔が取り付いた。

その時のための『リベリオン』じゃないか。

「Go to back Monster!!」（和訳：お家に帰りな化け物野郎!!）

『スティンガー  
STINGER』

強烈な吹き飛ばしの威力を誇る高速突進突き。

ドゴオン!!!!!!

化け物は吹っ飛び、ビルに激突。

だんだんと『メジャーハート  
心理定規』の姿に戻って行く。

「う……。私は何をしていたの……。ガフッ!!」

案の定彼女は吐血した。

悪魔に身体を明け渡した人間はよほど精神力が強くないと、その力の残滓（もちろん人にとっては害悪にしかない）の影響で全身から血を噴き出して死ぬ。

しかも、死ぬまで力に身体を蝕まれるから、大体は「苦しみ死に」するはめになる。

そうなる前に眠らせてやるのが礼儀だ。

「グフツ……一体私はどうなってしまったの？」

僕に聞いてくるか。

「自分を失って、この世のものではなくなったのですよ。このままだと苦しみながら死ぬ事になりますから、楽にしてあげます」

「そう……ガハッ！ありがとうございます」

自分が何をやったか理解していたのかな……。

……、殺す人間に「ありがとう」と言われるほど辛いものは無い。このときばかりは殺すしか救い方がない自分を殺したくなってくる。クソッ……！

僕は気づいていなかったが、僕の目からはひとすじの涙がこぼれていた。

秋紗は涙に<sup>それ</sup>気づいて僕に駆け寄り、右手を握ってこう言った。

「大丈夫。私が。ついてる」

その優しさにまた涙がこぼれたかもしれない。

「安らかに眠ってください……」

僕がそう言つと心理定規は<sup>かのじよ</sup>コクンと頷いた。

『<sup>サウアトリ</sup>隻眼の紋章』

左腕を炎に包んでの掌底。

バワン！！

その一撃は心理定規<sup>かのじよ</sup>の頭部の半分を焼き剥いだ。

「行こう。買い物へ。悲しい気持ちは分かるけど」

この時の秋紗の優しさには心が痛んだ。

原作には100%無かった事。

明らかにおかしい。すでに原作は崩壊を始めているのかもしれない。学園都市の人間が悪魔と化すのは確率的にも、どんな計算をしてもありえないはずなのだから。

邪神の復活はありえることなのだろうか。

気を取り直して。スーパーに着きました！！

## 闇の兆し（後書き）

いかがだったでしょうか？

主人公は敵には容赦がないけれど、悪魔に飲み込まれてしまった人や何かのために戦っている人には情け（即死などの）をかけます。

しかし、自分、守るべき人の命を狙う人間、自分の欲望のためだけに動く人間には容赦の文字もありません。

一方的な虐殺になります。

おそらくメインヒロインは姫神になりそうです。

ほかにも2、3人絡んでくる予定ですが。

次回は魔術結社に襲われまたもやバトルです。

## 襲撃2（前書き）

主人公やっぱりチートっぽいですが、  
でも、相手が雑魚だからでしょう。  
（多分）

## 襲撃 2

「何を。買おうか」

「うーん、昨日魚食べたからお肉にでもする？」

「そうだね。肉野菜炒めにしよう」

「秋紗の野菜炒めかあ。おいしそうだなあ」

「ふふつ。楽しみに。してて」

秋紗はものすごく料理がうまい。僕よりはるかに。

「とうまー、お肉お肉ー！！」

おい、まじかよ。ここで会うのですか！？

「インデックス、上条さんはお金がないのでせうよ」

「いいからお肉」

はあ。あの食欲魔人め。当麻も大変だよなあ。

「おい、当麻」

レベル5だから金は余るほどもらってるし、少し協力してあげましょうかね。

「だれでせうか？つて優一か」

「お金ないんですよ。僕レベル5だから、出してあげるよ」

「そんな、大丈夫だって。借りても返せないし」

「じゃあ、僕がピンチになったら助けてくれるってことでいいよ」

「そんなの、金があるのかなしとかでも助けるさ」

当麻がものすごく真剣な顔で言ったのがなぜかおかしかった。

「あはははっ！そこまで真剣にいわなくても」

「な、何で笑うんでせうか？」

「僕は第二位ですよ？そこら辺の雑魚に殺される危機はないです。リベリオンもありますし」

そう言ったら、インデックスが目の色を変えた。それはそうだろう。伝説の代物が目の前にあるのだから。

「それはほんとなのかな！？」

「本当ですよ。背中に背負ってる大剣がそうです」

「えっと、上条さんはリベリオンってなんなのか分からないんですが」

「伝説の悪魔殺しの剣なんだよ」

「僕が背中に背負ってる奴がそうです」

「はあ……」

当麻は何が何やらと言う顔をしてるな。

まあ、こんな話をしている間に会計も終わって、荷物を袋に詰めたりしているわけだが。

スーパ―を出て、途中までは当麻達と一緒にだ。

土手を歩いている時、僕は何かを感じた。

「あ、魔術の反応があるんだよ」

「それも、相当の数だな……」

「なんだって!?!」

当麻の驚愕を合図にしたかのように前方に無数の魔術師が湧き出て来た。

「秋紗、僕の後ろに!」

「うん!」

リーダーらしき男が進み出て来て僕たちにこう告げた。

「我々は、魔術結社『古き月の加護』。悪魔の息子よ、その命もらうぞ」

「悪魔の息子!?!どういう意味だ!?!」

「土御門から聞いていなかったのか!?!」

「そんな事一言もきいてないぜ!?!」

「あの猫野郎!?!」

「猫じゃないにゃー」

「土御門!」

「彼ですか。『忘れ去られた剣士』の息子というのは」

「そのようだね」

おいおい、マジか？

神裂火織とステイルⅡマグヌスカよ。

「私は……」

「あ、言わなくても知ってる。神裂火織と、ステイルⅡマグヌスでしよう？あなた方は有名ですから」

「喋っているとは死ぬぞ！悪魔の息子よ」

「うるせエな」

ヒュンッ！

イノセント・ゼロ  
『縮地』

でリーダーの目の前に瞬間移動。

シガン  
『震銃』

震動を纏った人差し指で貫く技。

ブズッ……。

脳天に一撃。

言うまでもなく即死。

場が騒然とする。

当麻はおそらくお怒りだろう。

「優ーイ！！何やってんだ！！！」

ほらね。

「……………。あんたと住んでる世界が違うんだ。殺さなければ僕が死ぬ。分かってくれ」

「クソッ！！！」

そりゃあ、納得出来るわけないよな。救世主<sup>ヒーロー</sup>なんだし。

「全員掛かれ！！！！！」

あーあ、始まっちゃった。

ミートパティ  
「肉食加工品にしてやるよ」

ブラスト・ブレイド  
『震動霊剣』  
アトミックスラッシュ  
『微塵斬』

相手を細かく切り刻む技。

「ぎゃあああああああ！！！！！」



スプラッタな以下略。

『七閃』

うん。ワイヤー攻撃だね。

「死ねっ！」

「うおっと!!」

「あぶねえ!!」

クナイかなにかみたいな飛び道具を飛ばしてくる。

うざったいな。

『デザート・ミニレ  
砂丘の神柱』

巨大な砂の壁を立ち上げ、攻撃を防ぐ技。

「大丈夫か？当麻」

「すまん。ありがとう」

ヒュッ。。

『テーブル  
HOPPER』

敵の攻撃をぎりぎりまで引き付け、わずかな移動で攻撃を避ける技能。

バン……！

僕は太ももから抜いた2丁の・45口径自動拳銃、その名も、

『アンジェロ・ディアボロ  
天使&悪魔』で相手を撃つ。

『アンジェロ  
ディアボロ  
左手用が天使。右手用が悪魔。』

ちゃんと英語で彫ってあるのだ。名前が。

こいつも『ホルト・ジュ  
白口紅』と同じように、『ノーマルショット』と『チャ

ージショット』がある。

「食らいやがれ！」

『トゥー  
サム  
タイム  
To Some Time』

2方向に銃を向け、時折方向を変えて超連射。上下左右前後のかなりの広範囲に弾丸をバラまく。

例えるならば「GAN「KATA」

マガジンを交換しなくても銃弾が出続ける。

引き金を一度引くと2連射してくれる。

「ぎゃああああ!!!」

僕の周りにいた魔術師を撃ち殺した後、後方に固まっている連中に不意打ち。

『エレクトリックショット』 『ライトアロー』  
『荷電粒子砲』 『光矢』

上空の大量の粒子を一気に震動させ、極太のレーザーを天から放ち、敵を焼き尽くす。

「これでかなり減ったかな」

「おらあつ!!」

パキンッ。

おお、『幻想殺し』も活躍してるね。

「食らえっ」

危ないなあ。

「よつと」

『マスタング』  
『MUSTANG』

敵を踏み台にし、空中に飛び上がる。

『フラランクス』 『モードチェンジ』  
『武器庫』 『変形』

『嫉妬』  
『ジェラシー』

武器庫が2つに割れて、中からガトリングガンの砲身と弾倉が飛び出してくる。

『アンジェロ ディアボロ』  
『天使&悪魔』 より遥かに威力と速度がまさった高速連射で弾幕を張る。

残り10人。

「あれだけの人数をたった数分で!？」

と驚いている奴の胸ぐらを掴み、地面に叩き付ける。そして『ストライク・シヨック』  
『収束』のエネルギーを直接解放して攻撃。

バゴォン!!!

ビキビキッ……。

余波で地面まで割れる。

残り8人。

『コクケン』 『コゲツ』  
『黒剣 弧月』

リベリオンを薙ぎ払うように振り抜き、円範囲に斬撃を飛ばす。  
ズズズッ、ズウン！！

僕を囲んでいた魔術師の首を飛ばし、遥か遠くのビルさえ両断する  
威力を誇る。

一人はステイルが捕らえており、その男に尋問をするという。  
僕らはこの場からそそくさと、立ち去った。

「もう出来てるよ。早く。食べよう」

戦闘の被害に遭わないように、家に帰っていた秋紗の出迎えを受け、  
秋紗特製の肉野菜炒めを食べて、その日僕は度重なる戦闘の疲れで、  
ソファで眠ってしまった。

「君は。一体何を。隠しているの」

そう秋紗が呟いていた事を僕は知らない……。

## 襲撃2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は魔術師の襲撃でした。

だんだん原作の様相を呈していなくなっている。

次回は日常&プチ戦闘です。

それでは。

## 束の間の日常1（前書き）

朝の話です。

それだけです。他には何も。

## 束の間の日常1

僕は昨日ソファで寝た。

度重なる戦闘の疲労のためだ。いくら転生者で「悪魔の力」を使えるとは言ったって、この世界に来る前までは、普通の人に比べると少し違う生活を送って来たものの、戦闘、殺害、襲われる。

なんてことは無縁（人生の最後は除く）だったのだから。

いきなり襲われるやら、強盗に巻き込まれるやらもう本当に死にそうです。

実際の所は、身体が半分吹っ飛んでも再生するような化け物じみた再生力と、心臓を貫かれても死なない生命力があるらしい。

（頭の中の知識より）

これは僕が半分だけ『悪魔』だからだと言う。

父親は伝説だし。普通の人間じゃなくて、純血の魔人らしいし。化け物じみた再生力は、父方の祖母が吸血鬼だかららしい。

つまり僕は半分人間、半分悪魔、4分の1吸血鬼。

この前に闇騎士が夢枕に立った時に教えてくれた。

というかそんなに化け物じみた再生力があるなら、刺されても死なんだろうに。

闇騎士曰く、「一度死んで、力が目覚めたのだろっ」だそうです。

はい、ふざけんなー。ちよっと力の発動遅いからー。と虚空に突っ込んでむなしただけなのでやめよう。

そんなことを考えながら起きたときの時間は午前3時。

何でこんなに目が早く覚めてしまうのだ、と悪態をつきながら起き上がる。

2度寝しようかと思ったが、それをしたら遅刻決定なのでやめた。転校して2日目（日曜日を除く）でいきなり遅刻は不良じゃん。

心理定規の怪物化の時に使った銃がまったく効かなかった点について思考を巡らす。

ホワイトジュー

『白口紅』は効いた。『破魔』の力があるのだろうか。

フランクス

ロストテクノロジー

武器庫は超技術だ。

さらには父親も使った武器だ。悪魔には効くだろう。

しかし、MK・17は効かなかった。おそらくこれは、MK・17が発射した弾丸が『普通』の弾丸だったから。

デヴィルハンター

『悪魔狩人』は違う。

『悪魔狩人』の場合は、僕の「悪魔の力」を直接練り上げて高濃度にし、弾丸の形にしているのだ。

普通の銃のまま僕の「悪魔の力」を撃ち出したら、その力の反動で銃そのものが崩壊する。

僕の方も疲れる。

だから、僕の持っている全ての銃を対悪魔用にアップチューン&カスタム。

それと同時に「悪魔の力」を基に魔力を生成。

僕独自の『破魔の術式』を複数組み上げる。

そして、『破魔の術式』を複雑に組み合わせさらに強力にする。

それで出来た術式を銃と周辺機器に刻み込む。

さらにマガジンにも同じ術式を刻む。

弾丸にはその術式を重ね合わせて術式同士の結合を強化したものを流し込む。

無限だし、今持っている銃の弾丸全てをあわせると軽く百万発は超えるだろう。

そんなものにいちいち術式を刻んでいたら日が暮れるじゃ済まない事になる。

だから、「流し込む」

僕の魔術は僕自身の生命力を使っている訳ではない。「悪魔の力」を使っている。

だからほぼ無限に魔力が生成出来る。

魔力と呼んでいいものかも分からない。



## 束の間の日常1（後書き）

次回は姫神が起きてくる所からです。  
学校もあります。

## 束の間の日常2（前書き）

主人公は訓練をしています。

彼があれほど強いのは日頃の鍛錬（笑）のおかげでしょうか。

## 束の間の日常2

銃のアップチューンも終了した。しかし、こんな喧しい作業を自分の部屋でやっていたら迷惑きわまりないので、地下の訓練場兼武器開発室兼銃火器倉庫で作業をする。

神様も凄いものを作ってくれたな。

地下訓練場は恐らく1？四方はあるだろう。さすが神様。やる事なす事すべて規格外だ。

時計を見ると、4時。

まだまだ時間があるので訓練でもしますかね……。

自分の部屋へ戻り、デスベラード殺唄のチャックをジジジ、と開け、斬魔刀を取り出す。

こんな芸当が出来るのも僕が伝説の息子だから。普通の人がこんなことやったら精神が崩壊して死ぬ。

殺唄を開く事が出来るのは相当の魔力を持つ者か、殺唄そのものが認めた人間しか開けられない。

訓練場に斬魔刀を持って入ると、自動で動く糸人形マリオネットの様なロボットがどこからか出てくる。もちろん、このロボットは武器を装備している。無論、実戦形式で戦うから下手打つと死ぬ。

僕の規格外の再生力があってこそ出来る訓練だと思うね。

「クンレンカイシシマス。キョウハ、キンセツセントウヲメインニシマス」

ここのロボットには高性能AIが搭載されており、設定した訓練プログラムにそって訓練をしてくれる。

しかも、複数体出てくる。

僕はロボットを遠慮なく破壊する。

一体どこからこの高性能ロボットを調達しているのかは僕にはさっぱり分からない。

神様の領分だろうから口を出す訳にも行かないだろうけど。

こんな説明をしてる間にも、ロボット達は槍を突き出したり、剣をふりまわしたり、バズーカ撃って来たり、ライフル乱射してきたりと結構危ないことになっている。

『ブロック  
BLOCK』

悪魔の力を敵の攻撃接触面に集中させ、ダメージを軽減する技。

ジャストタイミングでブロックすると、上位の『ROYAL BLOCK』が発動する。『ロイヤルブロック』の場合は、すべての攻撃を無傷でやり過ごせる。しかし、効果は一瞬。

『ブロック』『ロイヤルブロック』をすることに『ロイヤルゲージ』が溜まって行き、それを解放することで敵に攻撃したり、持続時間は短いけどどんな攻撃でも通さない魔力の鎧『王鎧』が発動可能になる。

この防御中心の戦闘スタイルを『護衛騎士』ロイヤルガードと言う。

まあ、戦闘スタイルと言っても、複数あるのでその都度説明しましょう。

「よっ、ほっ」

僕は攻撃を躲しながら、一番近くにいた、ロボットに肘で一撃。くの字に曲がって吹っ飛んで行った所で前方に向かって右拳を叩き付ける。

『拳征』ケンセイ

拳の形をした衝撃波を放つ。

これで1体目。

2体目には突き出して来た槍を『震動霊剣』ブラスト・ブレイドで叩き折り、接近して、『発泡両掌斬』スパークリンググレイジー

震動を纏った両手を勢いよく広げ、凄まじい衝撃と共に放射状に広がる斬撃を放つ。

この技の余波で3体が風に飛ばされた紙のように吹っ飛んだ。

「ジウゲキ、カイシ」

機械的な音声と同時にライフルの射撃が来る。

僕は走って銃撃を躲す。

だが、優秀なAIを搭載しているせいか、見越し射撃を使ってくる  
――避けられない！

なんちゃって。

『スピード  
SPEED』

5秒走るとより速く走れるようになる特殊技能。

ギューン！

『ダッシュ  
DASH』

『スピード』から方向転換し、さらに速度を上げる技能。

「ミサイル、ハッシャ」

「遅い！」

ミサイルを撃ち込まれる前に逃げる。

『スカイ  
SKY STAIR』

空中に魔力の足場を作り、それを蹴って高速で空中を水平移動する  
技。

ロボットとの距離が開いた。

『AIR TRICK』

姿が消えるほどの高速移動をし、敵の頭上に出現する技。

『MUSTANG』

敵を踏み台にして空中に飛び上がる。

ロボットより少し離れた所に着地。

このように回避、高速移動を主とした戦闘スタイルを『トリックスター  
奇術師』と  
呼ぶ。

『シンソウアイ  
疾走居合』

高速で相手に突進し、強力な斬撃（居合い）を繰り出す技。

『バットウニダンギリ  
抜刀二段斬』

抜刀し相手を斬り上げ、空中へと打ち上げたあと、共にジャンプし、

片手斬りに斬り落とす技。

「アトイッタイデス」

僕は斬魔刀を納刀した後すぐさま背中に手を回し、リベリオンを振り下ろした。

しかしそれはぎこちないバックステップで躲される。

僕はさらに踏み込み、技を繰り出した。

『リベリオン REBEL LION コンボ COMBO A』

袈裟 逆袈裟斬り上げ 回転斬り下ろしと続く攻撃ベースの速い3連撃の基本コンボ。

出が速くテンポも速めで、隙が小さく扱いやすい。

「訓練終了です」

と電子音声のアナウンスが入ると同時に秋紗が下りて来た。

「おはよう。タオルあるよ？」

「ありがとう」

タオルで身体を拭きながらリビングへ上がる。

シャワーを浴びたあと、簡単な朝食（サンドウィッチ）を食べて学校へ向かった。

## 束の間の日常2（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は学校から放課後にまたがるお話です。

主人公のツツコミ（？）が冴えます（笑）  
それでは。

束の間の日常3（前書き）

佐天に春の予感！？



### 束の間の日常3

学校に着いた。

土御門は学校を休んでおり、いない。何らかの事件が起きたのであるが、当麻に影響が及ばないのならば問題ないだろう。

「おはよう、当麻」

「ああ……、おはよう」

当麻の顔色が悪い。どうしたのだろうか？

十中八九『絶対能力進化実験』のことだと思いが。

「どうした？大丈夫か？」

「ああ……」

あきらか大丈夫じゃないだろうが。

つたく、一方通行の事を一人で背負い込む気かよ。

「ちよつと来い」

と当麻を屋上へ連行する。

「なにがあつた。話してみる。力になってやる」

そう言つと当麻はぽつりぽつりと話し出した。

「妹達」のこと、超電磁砲が一方通行に挑み、敗北した事。  
シスターズ レールガン アクセラレータ

今日の夜、実験を止めに行く、と。

僕が黙つて話を聞いていると、当麻は何か閃いたのか、唐突に聞いて来た。

「お前、学園都市最強に勝てるか？」

僕は嫌な予感がした。当麻の口ぶりから――死ぬ気なのではなからうか。

そんなことは絶対にさせない。

僕もこんな熱い側面があつたのだと、今更ながらに気づいていた。  
あつち

転生前では一欠片も見せなかった僕の別の面。

思考が高速回転していくのを感じる。

僕と言う崩壊因子が入った以上、原作がどう転がって行くか、それは神様ぐらいでないと分からないだろう。

それに、一方通行はただのもやしだ。

格闘戦なんてやったことがないだろう。

その点では僕と当麻に分がある。

自分の演算能力では一方通行には遥かに及ばないだろう。

だがしかし、僕の『悪魔の力』が加わったらどうだろうか？

この正体不明の力が。

理論や計算式などでは計れないこの力。

僕が能力以外の力、つまり『悪魔の力』やリベリオン、銃、オヤジ超古代兵器のふきを使うのは僕自身の『直感』だ。

そこに理論で量れる物は存在しない。

そこにあるのは少しの『思考』頭の中に叩き込まれた『経験』そして、『直感』

最悪、僕一人で倒せる相手だ。

いける。そう僕は確信した。

「倒せる」

「そうか！」

僕は陽動を引き受けた。

当麻の正義感から言って一方通行を殴らないと気が済まないだろう。

まあ、途中で僕も乱入するけど。

自己紹介をかねて。

「貴様ら！！何をやっている！！」

凄まじい怒声と共に飛び込んで来たのは吹寄さん。

「もうHRは始まっているのよ！何をやっているの！」

うつわあ。凄い剣幕。こりゃヤバいぞ……。

ずかずかと大股で進んで来た吹寄さんは、当麻に強烈な頭突きを食らわせた。当麻ははずると地面に崩れ落ちた（笑）

痛そうだなあ。

そうのんびりしていたら今度はこっちに来ていた。

「まずい！？」

ビュオンツ！

「うわっ！」

恐ろしい速度で突き出された正拳突きを間一髪、バク転して避けた。

「呆れるほどの身体能力ね……」

「そりゃっ！どーもっ！」

僕が受け答えしている間にも前蹴りやらフックなどが飛んできている。

「もう逃げられないわよ！」

「まずい！後ろはフェンス……！」

ゴン……！！

……。当麻に食らわせた以上の頭突き。

当麻のように意識は失わなかったが、一瞬意識がアンドロメダ星雲の彼方に飛んで行った。

吹寄さん、オーバースペックすぎでしょ。

僕と当麻は吹寄さんに引き摺られて教室に連れて行かれた。

泣き顔の小萌先生に怒られて気まづくなったり、青ピに殴られそうになって反射的に蹴り飛ばしたりと、HRでも結局騒いだので、無料サービスの頭突きを受ける事になったが。

今やっている授業は心理学らしいが、僕はレベル5の時点で授業に出なくてもいいらしい。

まあ、いろいろやらなきゃ行けない事も増えてくるだろうから、その時にこの特権を使わせてもらおう。

「七城ちゃんー、いまのはなしきいていましたですかー？」

「えっ？き、聞いていませんでした」

「ちゃんと聞かなきゃだめですよー」

「はい」

グースカピー……。

バッコオオンー!!!

な、何だ!?

「寝るな!馬鹿者が!」

いかん!おもしろくないから寝てしまった。

グースカピー…………。

結局爆睡。昼休みは学食だった。

放課後。秋紗は病院へ行った。僕は暇つぶしにぶらぶら歩くと、繁華街に足を向けた。

「いやっ!放してください!」

「てめえは無能力者だろうが!俺たち能力者の言う事ぐらい聞きやがれ!」

僕が見たのは佐天さんが裏路地に連れ去られる瞬間。

「はあ…」

あまりのクズっぷりに溜め息が出る。

とりあえず助けますか。

『スピード  
SPEED』

ギョーンッ!!

裏路地へ走る、走る、走る!

『レインボウ  
RAINBOW』

『SPEED』発動状態から敵を急襲するドロップキック。

「ぎゃあっ!」

背中に一撃。

気絶。

「テメエ何を……!」

と突き出して来たナイフを左足を軸に回転して避けつつ、がら空きになったなった延髄に、回転の勢いを乗せたまま拳を叩き付ける。  
最後の一人は、

『ゲッケン  
撃拳』

腰を落として放つ重いパンチ、を鳩尾にねじり込んだ。  
所詮、能力者と言っても雑魚は雑魚か。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

良かった。変な事はされてないようだね。

「じゃ、僕はこれで」

ヒラヒラ手を振りながら振り向かず去ってゆく――予定だったが。

「ま、待ってください！」

呼び止められてしまった。

「あの、…ありがとうございます！！」

僕は無言で頷く。

「あの、その、えーとっ……」

なかなか話せないようなので先を促す。

「何か？」

「その、ゆ、優一さん、って呼んでも良いですか！」

びつくりしたあ。そんなことかあ。

「構いませんよ。佐天さん」

「あ、あの、私も、る、涙子って呼んでください！」

「分かりました。それでは、御会いできる日を楽しみに。涙子さん」

「ありがとうございますっ！」

ふう、どうやら僕はまたフラグを立ててしまったようだ。

《SIDE：佐天》

やった！七城さん、じゃなかった、優一さんと喋れた！  
状況は最悪だったけど。

「御会いできる日を楽しみに」だって。

きゃー！！！！かっこいい！！

……、でもあの動きは凄かったよね。まるで軍人みたいな感じ。  
いっさい能力使ってなかったよね。（多分）

絶対あの人鍛えてるよね！

腹筋割れてたりして。あははっ！！

初春にメールして自慢しよーっと！

《SIDE：優一》

家に帰った。学生服を脱いで、部屋着代わりのスウェット上下を着る。

音楽プレイヤーをつないで、洋楽のロックを流す。

秋紗はまだ帰って来ていない。

まあ、今日僕はご飯食べないけど。

さて、夜まで寝ますかね……。

……すー。………。

### 束の間の日常3（後書き）

佐天にフラグが立ちました。

次回はいよいよ一方通行&アイテムとの戦いです。  
それでは。

## 死闘！（前書き）

主人公、夜の街を走る。

えー、暗部の守備隊に関してはねつ造です。

原作で、警備隊も何も居ないのはおかしいかな、と思ひまして。



死闘！

夜になった。

僕は仮眠から覚め、レトルトのパスタを食べる。

秋紗は検査入院だ。今日は帰ってこない、と言っていた。

地下の倉庫へ行き、銃を整える。

Tシャツの上に、赤いロングコートを羽織り、『リベリオン』を背中に、銃をコートのホルスターに、古代兵器をコートの内側に入れる。

実際はコートの中に入るサイズではないのだけど、『斬魔刀』の効果で次元を歪め、突っ込む。

アンチスキル スカイダンス で、マンションの屋上と屋上を飛び跳ねつつ、研究所へ急ぐ。

……、それにしても、学園都市の七不思議は地味に的中してるのが多い。

ロリ先生とか、当麻の『イマジンプレイカー幻想殺し』とか、シスターズ妹達とか。

その都市伝説の中に、新しいものがある。

『誰も操っていないのに動く糸人形。マリオネットその糸人形に会つと、手に着けた刃物で斬り殺される』ってね。

学園都市にしては随分とオカルト的だが、僕には心当たりがあった。『マリオネット/ブラッディマリー 魔界の下級悪魔が人形に入り込んで動き出した物。武器はナイフや、半月刀。人間界に出現する悪魔の中でもっとも弱い悪魔。ブラッディマリーは血を浴びた人形に下級悪魔が入り込んだもの。マリオネットよりは耐久力が強い』

と、僕の手帳には書き込まれている。僕が書いた覚えは無いのだが。悪魔が学園都市に出現している、と確定した訳ではないが、調査が必要だな。

魔術的な場所ではない学園都市にまで出現しているのならば、魔術的な場所、つまりはリーイーギリスや、バチカンなど、魔力が濃い場所には高等悪魔が出現してるかもしれない。

やっぱり、僕も便利屋でもやって悪魔退治した方がいいかなあ。

魔術の世界では僕の名前は超有名なからなあ、でも、アレイスターに許可もらわないといけないなあ。

めんどくせえ。

『自由に学園都市を外出できる許可』なんてもらえるか？無理っばいけど。

おっと、考えてる間に研究所の区画に到着した。

さてと、ここの警備隊、多分暗部だろうが強いかな？

攻撃開始。

ググッ……………ドオォン！！

僕は左拳を引き、僕がいたビルの屋上の空間へと叩き付ける。

ビキビキッ……………！！

もちろん、地上にいた警備隊は騒ぎ始める。

「どうしたっ！何があつた！？」

「大気にヒビ！？一体何の能力者だ！」

「なぜだっ？ここは研究区画だぞ！何故侵入を許した！」

僕のいるビルが崩れ始めると同時に、僕は地上に降り立つ。

「何者だ！」

「……………」

ズバツ！

目の前にいたおっさんを『プラストブレイド震動霊剣』状態の左腕で斬り上げて沈黙

させる。

その勢いのまま一回転して、空間に拳を叩き付ける。

ドゴォンッ！！

アースクエイクリベレイション  
『地震解放』

で、右にあったビル群を文字通り倒壊させると、さすがは暗部、僕

の正体に気づき始めたのか、増援を呼び始めた。

「こちら、A区画守備隊！学園都市第二位の攻撃を受けている！繰り返す！学園都市第二位の攻撃を受けている！」

「あの少年は『メンバー』、『ブロック』を壊滅させた実力者だ。うかつに近づくとこの世とおさらばだぞ！」

「やつは格闘戦に秀でている！狙撃を……！？」

その間違った認識が命取りだぜっ！

ドドドッ……！！

僕は『MP5SD2』を懷から出し、射撃。

「銃を持っているぞ！物陰に隠れろ！」

ちなみに、震動霊剣は、セメントぐらいならばっさり斬れるんだよね。

左の指全てに震動を纏って振り下ろす。

スパアン！

「ビルが……縦に割れた！？」

「いや、違うな、いまのは明らかに『斬撃』だ。斬ったんだろ？その指で。随分とおかしな身体持つてるじゃねエか」

「へえ……、切れ者もいるじゃん」

スパークリングデイズ  
『発泡両掌斬』

スパッ！

「うおっ！？」

その切れ者は僕の攻撃をレーザーブレードで防いだ。  
なかなかやる。

スパークブレイク  
『滅裂斬』

ズバァン！

腕を交差させることで相手を切り裂く。

「ぐぎゃあっ！」

これは防げなかったか。

「くそっ！強いぞ！もっと増援を」

まだ増えるのかよ。めんどくさいな。

「消し飛べっ！」

！？

ボゴーン！

「やったか！？」

……、はあ、びっくりした。

「残念、無傷です」

「なっ！??」

「邪魔です」

『衝撃収束』『上段蹴り』

踏み込みながら右足で蹴りを放つ。

バキッ！

首の骨が折れる嫌な音がして、手榴弾を投げたヤツは吹っ飛んで行く。

ウザッたいほど多いんだけど。

『グレン  
紅蓮』

火炎放射のように激しい炎を前方に叩き付ける。

前方の連中を黒焦げにしたあと、『イノセント・ゼロ  
縮地』

この区画を抜ける。

「敵は絶対能力進化実験場の方向へ逃走！警備を強化せよ！」

速いな。さすが暗部と言うべきか。

「発見した！殺害せよ！」

お前らに殺されるほど弱くねえっての！

ドン！ドン！

敵の射撃を避けて、壁に隠れる。

敵の居る方向へ身体を向け、左手を地面に付ける。

『デザート・シラソーレ  
砂丘の向日葵』

ベコオ！

そのとたん、地面が沈む。

「な、何だ！？」

「地面が沈んでる！」

「総員退避！」

バキンッ！

前方、球状の範囲がクレーターでもできたかのように沈み、敵を飲み込んだ。

「クソッ、かかれっ」

後ろから敵が襲って来た。

僕は側転して攻撃を避けると、背中 of 『リベリオン』を抜いた。

『HIGH TIME』  
ハイ タイム

敵を空中へ打ち上げる強力な斬撃。

また、打ち上げた敵とともに自分もジャンプすることもできる。

『HELM BREAKER』  
ヘルム ブレイカー

空中から急降下しつつ繰り出す一撃。いわゆる空中急降下斬り。

空中に居る敵や、極端に大きな敵に対しての有効な攻撃手段だが、

地上の敵にハイタイムを当ててから使うのも効果的。

『REBEL LION COMBO C』  
リベリオン コンボ

左袈裟斬り 右斬り上げ 左斬り上げ 左回転袈裟斬りと続く四連

続のコンボ。

どのような場面でも使えるオールマイティな技。

「だめだ、格が違いすぎる」

「……消し飛べ」

『エレクトリックショット』  
『シャイニーランサー』  
『荷電粒子砲』  
『星槍の烙印』

地球に降り注ぐ星の光を粒子震動させ、光の槍を降らす技。

「退避、退避ー！！」

終わったか。

もう敵はいない、かな。

## 死闘！（後書き）

次回はアイテムとの戦闘です。

主人公VS麦野沈利との壮絶な射撃戦がある予定です。  
それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1969x/>

---

とある少年の転生人生（アンノウンライフ）

2011年11月23日19時50分発行